

『純愛クロニクル』

著：弓月あや

ill：小禄

「ああ、嫌だ。黄色い肌の母親なんて、ゾッとするわ。私のママは白い肌に淡い金髪が、とてもきれいな人だったのに。あんな母親なんかとはわけが違うのよ！」

エミリは興奮したのか、声が大きくなってきた。酒を飲んでいるのかもしれない。

しかし今日のパーティの主演であるトマスの娘が、こんな大騒ぎしているのは外聞がよくないだろう。陸が窓を閉めようとする、目の前にエミリが立ち塞がった。

「どこ行くのよ。逃げる気なの」

「逃げるんじゃないです。窓を閉めようと思っただけです」

「やだ、それは英語のつもり？ 何を言っているかわからないわ」

エミリはそう言い捨てると、陸を真正面から見つめた。

「我が物顔で、偉そうにしないでよ。私は黄色い肌の母親と弟なんて、ゾッとするわ」

最後のほうは金切り声だ。この声が聞かれませんかようにと、祈る気持ちだ。

その時、何が気に入らなかったのか。エミリは持っていたグラスの中身を、陸に向けてぶちまけたのだ。せっかくのタキシードの胸元を濡らされてしまった。

その姿を見て、彼女は大声で笑う。

「みっともないわ。でもお似合いよ。格式あるタキシードは、サルに似合わないわね！」

一方的に言い放つエミリは、勝ち誇ったような表情を浮かべる。だが。

「大きな声でお笑いになるのは、レディの振る舞いとして感心しませんね」

低い声が聞こえ、レースの長いカーテンが風に舞い上がる。

陸が顔を上げると、そこには長身の青年が立っていた。

きらきらした金髪。身体に吸い付くような上等の生地で作られた、ディナージャケット。格式ある漆黒の服は、艶やかで白い肌を何とも際立たせる。

陸が驚いたのと、エミリが声を上げたのは同時だった。

「エリージャ！」

そう呼ばれた青年は、物憂げに瞬きをしてみせる。長い睫に縁どられた切れ長の瞳は、イエローやゴールド、小豆色や銅色などの交じった不思議で神秘的な琥珀の瞳。

陸の脳裏に、同じ色の瞳をした少年が過る。

まさか。もしかして。いやそんな。でも。でもでもでも。

それは十三年も前に、陸の手を取って踊ってくれた少年の瞳と酷似していた。

目の前の青年は、あの少年が成長した姿ではないだろうか。いや、そんなに都合のいい話があるわけがない。しかし似すぎている。

「エリージャ！ いらしていたなんて、知りませんでしたわ！」

歓声を上げたエミリに、青年は優雅なしぐさで唇に人差し指を当て、「しー」と囁く。

「エミリ。あなたのようなレディは、もっと優雅に、美しく微笑まなければなりませんよ。先ほどから大きな声が聞こえていましたが、あなただったのですね」

その一言で、さっきまでどす黒かった義姉の顔色が、パッと赤くなった。

「い、嫌だ。ちょっと悪ふざけをしただけです。ゲームをしていたの。ね、そうでしょ」

陸は話を振られて戸惑ったが、ギッと睨まれたのが怖かったので合わせることにした。

「あ、そうです。ゲームしていたら興奮しちゃって」

「ゲーム？ そのせいで、あなたは濡れているのですか」

陸の返答を聞いて、青年はプレスされたハンカチを差し出してくる。その瞬間、覚えのある香りが漂う。清廉な香りだ。

「そんなきれいなハンカチで拭いたら、汚れちゃいます。ぼくは大丈夫ですから」

「構わないよ。せっかくのジャケットが台無しだ」

青年は惜し気もなく真っ白なハンカチで、陸のワインで濡れた胸を拭いてくれた。恥ずかしくて顔を俯けた瞬間、すぐそばに立つエミリの表情が目に入る。

憎悪の表情を浮かべていたので、息が止まりそうになる。

ものすごく怖くてエミリに視線を戻せない。苦しくなって胸を思わず押さえると、その手を青年に握られてしまった。

「どうした？ 胸が苦しいのかな」

「い、い、いいえ……っ。そうじゃありませんけど、あの、は、離して？」

「ちゃんと拭かないと、染みになってしまうよ」

エミリを見れなかったが、きっとまた睨まれているのは気配でわかる。そんな陸をどう思ったのか、彼はまじまじと見下ろし囁いた。

『災難でしたね』

陸はその一言を聞いて目を見開いた。青年が日本語で話をしたからだ。

『日本語が話せるんですか』

陸も思わず同じ言葉で返すと、彼は口元に笑みを浮かべている。

『取りあえず着替えて、メイドに染み抜きを頼みましょう。着替えも貸してくれると思います。美しいタキシードが汚れるのは悲しい』

『ありがとうございます。あ、でも』

二人が日本語で会話をしているのが、エミリの癪に障ったらしい。

「私にわからない言葉で会話をしないで。マナー違反だわ」

最初に日本語を使ったのは青年なのに、完璧に陸のせいにされている。困っていると青年は、穏やかに英語で答えた。

「失敬。私は日本に留学をした経験があるので、かの国を懐かしんでしまった。不快に思われたのなら謝ります」

そう言うとエミリは苛々した様子で、「別に構いませんわ」と早口で言う。

「でも、野蛮な国の言葉など使うのは、よくないわ」

「日本はとても歴史が長く、素晴らしい文化に富んだ国だよ。そして知性的で愛情深い人々が住む、尊

敬に値する国でもある。私は日本が大好きなんだ」

「もう結構。エリージャがそんなお考えだなんて、ガッカリだわ」

エミリは不快を露わにして、バルコニーから出て行ってしまった。その後ろ姿を見ながら、青年は肩を竦める。

「怒らせてしまったようだ。あなたにも、不愉快な思いをさせてしまったね」

「そんなことはないです。あの、エミリとお知り合いなんですね」

「ええ。彼女と知り合いというより、父君のトマスとは長い付き合いです」

「でも、トマスとは年が違いすぎませんか」

「そうだね。彼は聴講生として私が勉強していた大学の、同じ講座にいた。そこで偶然、隣の席に座ったことが縁で知り合ったんだ。とても紳士的で博識で、すぐに仲良くなれた。確かに年齢は離れているが、私は友人になるのに年齢は関係ないと思っている」

トマスの名前が出て、何となくホッとした。ウィトキン家のパーティの招待客なのだから、親交があるのは当然といえば当然。信頼できる人物だという安心感だ。

青年はすっと手を差し出す。

「改めてご挨拶させてください。エリージャ・ヴェレカーです」

「はい。ぼくは高樹陸です。今日の花嫁、高樹祥子の息子です。よろしくお願いします」

「陸、お近づきになれて光栄です」

手を差し出されたので握手だと思い、こちらも出す。だが、陸の指先を手を取った彼は、その甲にくちづけをしてきたので、びっくりしてしまった。

古い映画の中で、騎士がお姫様にするくちづけと同じように触れられるなんて。

陸が知らないだけで、外国では当然の挨拶なのだろうか。

「あ、あの、英国の方って、男同士で手の甲にキスするのは当たり前なんですか」

恐る恐る訊ねてみると彼は顔を上げる。目元は先ほどと同じに、微笑みを浮かべていた。

「男同士でキスというのは、日本人にはない習慣でしょう。欧米では敬意を示す時、例えば自分よりも年上の方に、こうして手の甲へくちづけることもあります」

敬意や年上の方と言われ、ちょっと首を傾げた。彼とは今さっき初めて会ったのだ。

その疑問が顔に出ていたのだろう。彼は可笑しそうに目を細めた。

「納得いかない顔だね」

「いえ。ただ今日が初対面なのに、そんなに礼を尽くしてくださるんだなって思って」

「では言い方を変えようか。十三年ぶりに再会した私のお姫様に、深い愛情を示すためのくちづけ。これでいかがですか」

十三年ぶり。そう言われて驚き、言葉が出なかった。

「あの、それって」

「パーティの夜、可憐な桜色のドレスに身をつつんで泣きじゃくっていた、可愛い私のお姫様。まさか再会できるとは思わなかった」

その言葉に、今度こそ呆然とする。この人。この人は。

「じゃ、じゃあ、あなたはあの時の……」

震える声で話す陸が可笑しいのか、彼は眩しいものを見るみたいに目を眇めて笑う。

「こんなに立派に成長されているなんて、本当に時の流れは早い。ふたたびお会いできて光栄です。私の姫君」

びっくりして言葉を失っていると、彼は陸の両腋に手を差し入れ、一気に抱き上げた。抵抗する間もなく持ち上げられて、大きな声が出てしまった。

「わあ！ お、下ろしてください！」

「あなたはあの頃と、まったく重さが変わらないみたいだ」

「ま、待って！ 怖いです、本当に怖い！」

見上げるほど長身の彼と、同じぐらいの目線になるのは恐怖だ。『怖い』と言って怯える陸を、彼は意外そうな表情を浮かべて見つめている。

「怖い？ それは残念。昔のあなたは、くるくる回すと大喜びだったのに」

「こ、子供の頃と今じゃ、ぜんぜん違います！」

すんと下ろされて、その拍子に彼の胸に埋もれるような格好になった。

恥ずかしくて身体を離そうとすると、ぎゅっと抱きしめられる。

「それより私のお姫様は、いつから男になったのだろう。出会った時は、これ以上ないぐらい可愛い姫君だったのに。……びっくりだ」

低い声で囁かれて顔を上げると、彼は複雑な表情を浮かべていた。

そう言われて、初対面の状況を思い出す。あの時の陸は、おふざけで着せられたドレス姿だった。確かに混乱させてしまうだろう。

「あ、あの時は誰かがふざけて、ドレスを着せられたんです」

「ふざけて？」

「はい。でも、おかげで母にもものすごく怒られて、散々でした」

「……そのタキシードも、とてもよくお似合いだ。小さなジェントルマンだね」

「ぼく、十七歳ですよ。小さいなんて、ひどいです」

そう言うと彼は戸惑ったような瞬きを繰り返す。どうやら、もっと下だと思ったようだ。身体も細く身長も百七十センチに満たない陸だから、仕方がないといえば仕方がない。

「十七歳？ ずいぶん幼く、いえ、若々しい」

言い直してはいたが、はっきりと童顔だと指摘されたも同然だ。

「いえ、いいです。童顔なのは承知しているし。日本でも、よく子供扱いされています」

「子供扱いというか、こんな初々しい人が存在する奇跡に感謝したい」

「誰に感謝をするのですか」

「万物を司る神々に」

仰々しい言葉に目を丸くすると、彼は可笑しそうに微笑んだ。

「再会できたのも嬉しいが、私を覚えていてくれて本当に嬉しい。夢のようだ」

「だって忘れられません。初めて会った時は、王子様が現れたのかと本気で思いました」

その言葉にエリージャは、蕩けそうな表情を浮かべた。

「いいえ。あなたのほうこそ、可愛らしくて気高い姫君だった」

エリージャはそう言うと身を屈め、陸の頬に軽いキスをした。そのとたん胸が弾む。

「先ほどのキスは敬愛。今のキスは恋情です」

エリージャはそう言うと、陸の身体をきゅっと抱きしめた。

「エ、エリージャ……っ」

「ごめんね。私はあなたと再会できて、愚かなぐらい浮かれている」

「どうして浮かれているんですか」

「十三年も前に会ったことを私が、ずっと忘れていなかったと言ったら、あなたは笑うかな」

きょとんとしている陸の唇を、彼は人差し指でなぞってくる。

「愛くるしくて無邪気なあなたを、いっそ攫ってしまいましたかった。けれど、そんなことができるはずもない。それでも、ずっと心の奥底に封じ込めていたんだ」

どう答えていいかわからなかったが、それでも小さく頷いた。

同じ。同じだ。自分と同じことを、この人は考えてくれていた。

胸の奥が温くなる言葉が、じんわりと沁みた。

「ぼくも覚えていました。なぜか、ずっと忘れられなくて」

「本当に？ 小さなお姫様が私を覚えていてくれたなんて、光栄だ」

彼は囁くような声で言い、またしても陸を抱きしめてくる。この過剰なスキンシップを怒るべきなのか、それとも抱き合って喜ぶべきなのか。

「ワルツだ」

広間から聞こえてくる優美な音楽に、陸は顔を上げた。その陸に、エリージャは手を差し伸べてくる。紳士が淑女を誘うように。

「踊っていただけますか」

「え？ で。でも、ぼくダンスなんて無理です。今日はドレスじゃないし」

「無理？ 以前は一緒に踊ったのに。とても上手だったよ」

そう言うとエリージャはふたたび陸の手を取り、その甲に唇を触れさせる。

「あ……っ」

熱い。火の玉が落ちたような錯覚に、思わず眉を顰めてしまった。

「十三年前と同じ。音楽に合わせて、私に身を委ねればいい」

囁きに、頭がくらくらしてくる。この人の言葉に酔ってしまいそうだった。

手を取られ優雅に踏まれるステップに身を任せているうちに、何だか夢幻の階段を踏んでいるような、そんな不思議な気持ちに囚われる。

「初めて出会った時、あなたがあんまりにも可愛くて、ずっと一緒にいたかった」

「何のパーティか覚えていませんが、ぼくは招待客じゃなくて母のオマケでした。酔っていたらしい他の客に、おふざけでドレスを着させられて母にはこっぴどく叱られました」

「そうだったのか。では、あの晩あなたと出会えたのは、すばらしい奇跡だったわけだ。やはり、我々は神の恩恵を授かっている」

「恩恵？ ただの偶然です」

「偶然だなんて。とんでもない、この世において偶然などありえない」

エリージャはそう言うと音楽に合わせて、くるりと陸を回らせる。それが楽しくて笑ってしまうと、彼も微笑んだ。

「陸、あなたの笑顔は素敵だ。いつも、そうやって微笑んでいてくれ。私のそばで」

そう囁かれて、くすぐったくて首を竦めた。彼の言葉は魔法に思える。

以前、会ったことがあるとはいえ、こんなふうに男同士でダンスを踊ったり、頬とはいえキスをしたり、どれもが普通ではないことばかりだ。

それでも、この月灯かりの下では、何もかもが不思議な魔法に思えてしまう。

熱に浮かされたような思いで顔を上げると、思いの外、近くにエリージャの眼差しがある。ちょっと狼狽してしまうと、彼は少し苦しそうな表情を浮かべた。

「私は十三年前、東の国で会ったお姫様が忘れられなかった。まだまだ幼く、言葉も拙いあの子は、私の腕の中で楽しそうに踊っていた」

彼はそう言うと陸に添えていた手を離し、跪く。

「エリージャ？」

「私も日本から帰国し、ずいぶん時間が過ぎた。もう、あなたに出会うことはない、ずっと諦めていた。だが、こうして巡り会えることができたのは、運命だと思う」

そして驚いている陸の手を取ると、その甲にくちづけた。

「どうか、私エリージャ・ヴェレカーの花嫁になってください」

「.....は？ はなよ」

「そう、花嫁。私は一生、あなたを大切にする」

「は、花嫁って、ぼく男です。結婚なんか、できるはずが」

「男でも女でも関係ない。私の心は十三年前に、あなたに囚われた。あなたは、私の花嫁になるべきだ。これは運命なのだから」

「運命って言葉で性別は超えられません」

「何もかも凌駕する。それが運命というものだ」

彼はそう言うと陸の手の甲にふたたび唇を押しつけ、そっと舌を這わせた。火傷したみたいに熱く、思わず声が出てしまったけれど、彼は手を放してくれない。

甘くて淫らな、蕩かす愛撫。陸は足ががくがく震えて、倒れてしまいそうだった。

青天の霹靂とは、このことか。

この夢のように美しい人は、いったい何を言っているのだろうか。

呆然としている陸の耳に、優雅なワルツは奏でられ続けている。それが天上の調べか、悪夢のワルツなのかは、わからないままだった。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>